食事も大切、トイレも大切

災害時に困らないために

マンホールトイレを導入

阪神淡路大震災のときや東日本大震災が起きたときは、避難所でのトイレ不足は深刻でした。避難所で生活する人に対して、数が足らず、長い行列ができます。使用できる水も限られ、プールの水を使っても、すぐになくなりました。「食事はおにぎりだけでもいいからトイレを何とかしてほしい」。震災で避難した人からは、そんな声が多くあがったと、当時、報道されています。

避難所で必要不可欠なトイレ。長岡京市では、マンホールトイレシステムを導入し、災害時に備えています。このマンホールトイレシステムの導入は、京都府下で長岡京市が初めてです。

現在、市内の８つの小学校と３つの中学校で整備を終え、25年度中には、市内の小中学校すべてに設置が完了します。

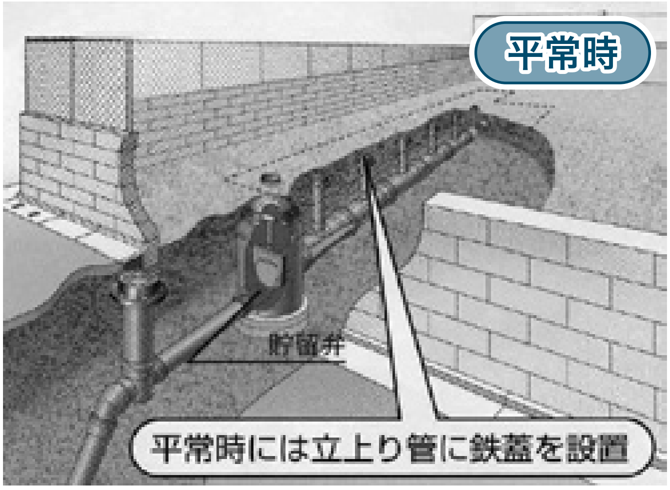
マンホールトイレって

あらかじめ地中に埋めてある管の上にトイレを設置します。管は、地震に対しても壊れにくいように造ってあります。汚物は管に溜めてから直接下水道に流すことができ、衛生的です。トイレットペーパーも備えてあり、設置後すぐに使用できます。

被災地からも視察があります

マンホールトイレの整備は、全国でも先進的な取り組みとされ、他都府県から視察があります。東日本大震災以降、被災地である関係各市を含め、27団体１６２人の職員や議員が視察されました。

▲東日本大震災の被災地である宮城県石巻市から議員団の視察（平成24年11月）



▲マンホールトイレの構造。
地中に埋めてある管の上にトイレを設置します。